

基調講演

まきの あつし
牧野 篤

「よきこと」をつむぐ、「よき存在」になる
—エイジレス・ライフを楽しむために—

大正大学地域創生学部教授・東京大学名誉教授

基調講演のアーカイブ視聴はこちらから：

牧野 篤



今回の大きなテーマが、みんなの「ふるさと」をつくる～多世代交流を通した誰もが活躍できる地域づくり～ということになっています。私の方からは、この基調講演のテーマを「よきこと」をつむぐ、「よき存在」になる-エイジレス・ライフを楽しむために-とさせていただきます。

まず、今回、高齢社会フォーラムということなのですが、皆さん自身は、例えばこの高齢社会とお聞きになって、どんなイメージを持たれるでしょうか。少し前までは、お年寄りばかりの社会になってしまうのではないか、お年寄りだけの社会ではないかと言われていたのですが、みんなが長生きになった社会であり、そこには当然子どもたちもいます。

そして、しばらく経つと、今は高齢化率が約3割です。65歳以上の方が全体の人口に占める割合が約3割なのですが、あと30年ほど経つと、4割くらいになる。高齢の方が多い社会になっていくわけですが、そこには当然若い方々も、子どもたちもいます。その意味では、多世代でこの社会をどうつなげていくかということを考えたらどうかと思っています。

もう一つは、この「ふるさと」を作るということなのですが、皆さんはいかがでしょうか。ふるさとをお持ちでしょうか。その時に持っていると思われる方がいらっしゃると思いますが、このふるさとって一体何だと思われますでしょうか。そんなこと当然だと思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、今はなかなかやはり若い子たち、子どもたちにとってみると、ふるさとって一体何なのかよく分からなくなっているところがあります。

そして各地で、私の専門が教育学ですので、各地でふるさと教育、特に今は、少子化、高齢化の中で、また人口減少の中で、いろいろな地域で人が足りなくなっている。また、後継者不足だということの中で、子どもたちに残ってもらいたい、また帰ってきてもらいたいということで、一生懸命ふるさと教育をやるのですが、どうもあまり成果が上がっていません。一生懸命この歴史や文化、それから偉人の話や物産、ものが豊かであるなど。また、風土の話をされるのですが、あるところでこういう教育をしてきたところ、子どもたちが何と言ったか。「何で僕にそんな関係のないこと、私に関係ないことを教えるの？」と言い始めてしまった。

そこで、大人がこれはどうしようかと仰天しました。その時に、大人たちが思ったのが何かというと、この子たちの外にあるものです。歴史や文化、そうしたものを教える必要はあるが、教えた後に、それを自分ごとにできる何かが足りないのではないかと思い始めた。大人にしてみれば当然のことであるものが、子どもたちには無いのではないかと思い始めた。では一体何なのだろうか。ということです。それだけお話をしておきたいと思います。

私が関わっている島根県の益田市という人口 42,000 人の小さな町があるのですが、ここでやっているカタリ場、今は対話プラスと言いますが、これは多世代で、特に大人たちが自分の人生マップを子どもに見せながら、自分の山あり谷ありの人生を、率直に話して聞かせる。そうすると子どもたちはそれを受け止め、自分はどのような大人になりたいのだろうということを考えるようになる。それを受けた子たちが、今度は高校生が小学生とやり始める。たった10数年の人生だが、小学生に語って聞かせる。そうすると、今度は小学生が中学校になった時に、自分もやりたいと言って小学生とやり始めるようなことが起こる。これは今10年ほど続いているのですが、全市民の大体3割から4割ぐらいの人が、語り合った経験がある街になってきている。そして子どもたちですが、高校まであるので、高校まではみんな町内にいますが、高校が終わると、9割が出て行ってしまう街です。過去は2割しか帰ってこなかったのですが、最近では、7割の子たちが帰ってきたいというような街ができてきている。

益田版 カタリ場の動画視聴（2分30秒）



皆さん楽しそうに語り合い続けています。そんなことの中で、やはり次の世代が育ってきます。そして例えば、私たちも関わってきていますが、こどもたちが何を言い始めたかという、学校にいと、失敗してはいけないという不安で仕方がないですが、地域の大人たちと一緒にやっていると、失敗が怖くなくなると言い始めている。

これは対外的に出すものなので綺麗にまとめられていますが、どんな風に怖くなくなったの聞いたところ、各分野のスペシャリストがおられると書いてありますが、こんなことは言わなかったです。本当は何と言ったかという、地元には失敗のデパートがいっぱいいますからと言いました。彼らにしてみれば、大人たちは失敗続きの人生です。ですが、ちゃんとここに生きてるのではないかということになる。そうすると、それは失敗なんですか。ということになると、いや、失敗ではない、ちゃんと生きてきたのだから。そしてこどもたちも、大人たちと交流していくうちに、大人ってすごいと思い始める。自分の親ですら、自分に面と向かって自分の人生を語ってくれないのに、地元の人たちが自分の人生を語ってくれることで、こどもたち自身が、その辺でふらふらしているおじさんは、何だか嫌だと思っていたのが、このおじさんすごいと思い始めるようなことが起こる。そして、こういうことが起こっていくうちに、何が起こってきたかという、こういうことが始まってしまった。



こどもたちが自分たちで地域のためにこんなことができるよと言い始め、自分たちでチームを作り、そして小学校区に公民館があるため、その公民館に提案するようになった。そうすると今度、公民館の職員の方が、いや、それをやりたいのであればここにおじさんがいるから、紹介してあげると言って、紹介してもらう。

こどもたちが大人と一緒に、地域のために何かやってみるというようなことが起こり始めていく。そしてこどもたちは、もうこの街では、保護され教育される対象ということだけではなく、むしろ大人と一緒に地域を作っていく仲間なんだという形でとても尊重されています。そして、こどももやはり大人を尊重するという関係ができ、動き始めている。そんなことがこれから一つある社会の姿ではないかと思います。

Compassion（共感）

Compassionate Community

共感（でも、それだけではない深い意味）
基本はPassion=悲しみ・苦しみ
Con(Com)=分かちあう

Compassionとは悲しみを分かちあうこと
相手の身になること

ここから、英語が重なってしまうので申し訳ないのですが、お付き合いください。この中で何が起ってたかということなのですが、実はこの「Compassion」という言い方があります。これは共感と訳したりしますが、本当はこの共感と訳す、これは実は2つの単語からなる英語です。

ConとPassionから成っており、Passionというのは、日本語では情熱と訳されたりするが、これは、後からついてきた意味で、本当は、悲しみや苦しみという意味です。Conとは共と訳すのですが、共という字も、同じものを一緒に持つということではなく、切り分けて自分のものにしていくという意味です。共感と訳していますが、本当はCompassionは誰かの悲しみや苦しみを、自分事にしていくという力です。

これ、私たちは、いい人間関係があると、そういう力が発揮されることが分かっています。例えば、皆さん自身も、例えば誰かが苦しんでいたり、また病気になって、どこか痛いと言っていれば、心配になる。痛いよねと思えるようになってくる。そういうことが起こります。そうすると自分も嫌なので、それを何とか解消しようとして、苦しんでいたり悲しんでいる人のために、何かいいことをしようとしてしまう。

Well-being（幸せを感じられる状態にあること）：

Compassionが基本となって
自分が「よき存在」となること

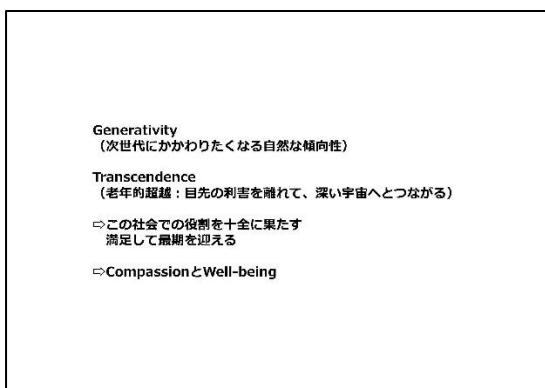
「よき存在」とは
社会の中であって
他者を自分事化して
「よきこと」をする存在
＝当事者性を持って生きること

Well-beingな個人が持続可能な社会を生みだしていく
個人のWell-beingと社会のWell-beingは「よき存在」として
一つになる

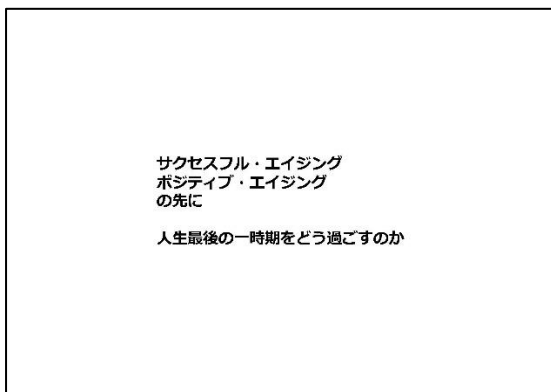
それは例えば、だから、いい関係があればいいことをしようとして、そして自分が良い存在になっていく。そうすると、流行り言葉になっているWell-beingと言いますが、これ幸せを感じられると言ったりしますが、自分自身が幸せな存在になっていく。

そうするともっとそれをみんなのためにやっ払いこうという動きが出てくるので、これを、日本語では恩送りという言葉があります。受けた恩を返すのではなく、恩を受けたらみんなに送っていく。そして送っていくことにより、お互いがいい存在になっていき、良いことをしようとするようになっていく。そうすると、社会全体が良い社会になっていく。本当はそういう動きがあるのではないか。私たちは、本当はそういう力を持っているのではないか。ということです。ただ、それがうまく、もしかしたらまだ、みんながCompassionを感じ取り、そして良いことをしようとして、相手のために何かいいことをして、そしていいことを受けたら、どんどんそれを送っていき、社会全体を良いものにしていこうとなっていくのは、もしかしたらみんなバラバラになってしまっているからかもしれない。

その意味では、ちゃんとつなげていくことがこれから大事になってくるのではないかと思います。



さらにもう一つ、英語が入ってしまうのですが、なかなか日本語にならない言葉があり、今は実は、高齢社会です。そして高齢期、例えば私も一旦退職をし、次の大学に移っていますが、私も一応、統計上は前期高齢者です。



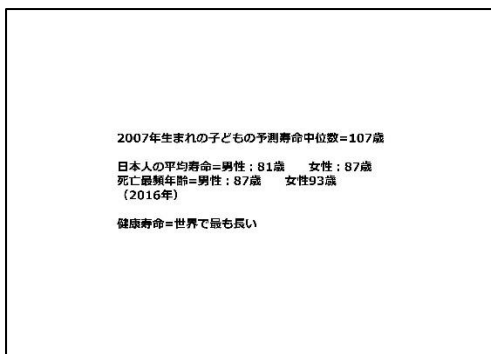
何が問われているかという、これもカタカナで申し訳ないのですが、サクセスフル・エイジングやポジティブ・エイジング、簡単に言うと、企業を退職された方々。実は、介護保険が始まって今年で26年です。

四半世紀経つのですが、介護保険ができる頃に企業退職者でうちに帰ってきたお父さんたちのことを何て呼んだか覚えていますか。お母さんたちが、お父さんのことをこう呼びました。濡れ落葉と言ったのです。言われた男性は知らないです。女性は知っているはず。何て言われたかという、企業を終えて帰ってきて、家でゴロツと横になっていると、濡れた落ち葉みたいにはいても剥がれない。それから奥様のスカートの裾に絡みついて取れなくなってしまう。さらに俺も族と呼ばれ、奥様がどこか行こうとすると俺もと言ってついてくる。邪魔だと言われていた。そういうようなことを言われていたのですが、それから20数年経つ中で、男性も今、企業終わってからも活躍の仕方を覚えてきた。多くの方々が企業を終えてからも、舞台を乗り換えて、このサクセスフル・エイジングです。社会貢献をする。社会でいろんな活動をされる。今日先ほど事例発表があった方々も、社会でいろいろな活躍をされていて、そして人望が厚い方がたくさんいらっしゃる。それが生きてこられた。これをいわゆる老年学というか、高齢の方々のことを研究する学問の方では、サクセスフルな成功したエイジング、年の取り方だ、また、ポジティブな積極的な年の取り方だと言ってきたのですが、実は私もいろいろな方々と付き合いがありますが、実はまだ最後のところをどうするかがまだよく分からない。どういうことかという、企業で頑張ってきて退職し、まだ元気だから、社会で活躍をされて最後の10年間、15年間ぐらいはどうなるのかという、なんとなく寝たきりで終わってしまうような感じになっています。そして私もいろいろな団体とインタビューをしたりしていくと、やはり最後は嫌だよと皆さんはおっしゃいます。なんておっしゃるかという、この私に関わった団体も、大体85歳ぐらいまで皆さんお元気で活躍されているのですが、80歳後半ぐらいになると、やはり

体も気力もついていけなくなるため、引退されてしまう。どこに行ってしまうのかと皆と話をしていると、いや、分からない、消えてしまうと言っている。大体うちへ帰ってしまうのではないかとおっしゃる。その先が怖いのです。いや、ちょっと嫌だと言うのです。何で嫌なのですか。と聞くと、企業で家庭がほったらかしになり、今度は社会貢献でほったらかしになり、帰った時に、かみさんとの関係が怖いと皆さんおっしゃいます。男性ですが。もっとおっしゃるのは、生きてればいいが、一人になっていたらどうするのか。もっと言えば、老老介護かなどと言い始めてしまう。最後のところのしまい方がよく分かっていないところがある。それを例えば、こういう言い方があります。「Generativity」という、これはもう少し言えば、年を取っていくと、次の世代に関わりたくなってくるという本性があることになっています。私たちは、さっきのCompassion、共感もそうです。私たち人間が生まれてきて、進化してくる過程で、家族を作り、社会を作り、更にそれを世代をつなげてくるということをして、今までいるわけです。その家族を作って社会を作るときに、やっぱり共感力が生まれてくるようになっていき、更に世代をつなげて歴史を作ってくるという過程で、やはり年長な方々が、年少の方々に関わりたくなってくる。先ほどの益田の高齢の方が自分の人生を語るみたいに語ってくるようになる。これをGenerativity、世代間で関わりたくなってくる本性があるのだと言われます。

もっと言うと、これはいいことがあることになっており、この十分に関わっていくと何が起るかというと、これも英語で申し訳ないですが、Transcendenceという、ひっくり返るという意味なのですが、老年的超越が起ると言われ、簡単に言うと、肉体は滅びても、自分の心のようなものはちゃんとつながっていくので、死ぬことが怖くなくなるのだと言われたりします。だけどこれは実は条件があります。何かというと、やはりちゃんと高齢の方々もこどもたちと触れ合う環境がないと、このGenerativityは生まれないと言われたりします。そして、もしかしたら今の日本が、みんなが孤立してしまっていて、そして死ぬことが怖い社会になっているとすると、もしかしたら高齢の方々もこどもたちと触れ合う機会がないのではないか。もっと言えば、お互いに人々が関わり合ってつながり合っていく環境がない。そんなことの中で自分だけを守らなきゃとなっていく中で、もう死ぬことが怖くなってしまふ、または、生きることそのものが辛くなってしまふといったことが起こっていないだろうか。そうすると、やはりこどもたちも同じような状況にあるのだろう。一人ひとりがバラバラになっていく中で、大人たちってつまらないと思っている。そして自分の人生を考えていくと、いや、あんな大人にはなりたくないと思うだけで、いや、こういう大人になりたいって思うことがないのではないか。それというのが、生きていて面白いかということ、多分つまらないのではないかということになります。その意味で、やはりつなげていくことを考えながら、私たちはこの社会をどうするのか。これが高齢社会の大きな課題ではないか。

もう少し言えば、この高齢社会というのは、お年寄りだけの社会ではなく、こどもたちも、ちゃんと生きていく社会なので、私たちはやはり先輩方から受け継いだこの社会を、ちゃんとこどもたちに伝えていかなければいけない。その時にどういう関係を作っていくのかといったことが、問われてきているのではないかと思います。



今の日本の高齢社会はどんな状態かという
と、例えば、これはとても有名な数字です。今
年、高校3年生の子たちの、予測寿命の中位
数と言うのですが、簡単に言うと、今生まれると
その子の血縁から、いろいろな環境から入れて
いくと、大体の予測寿命が出ます。

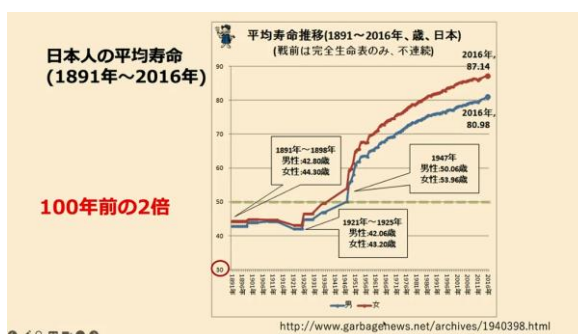
それを短い方から長い方にずっと並べていき、真ん中に来る数字が107です。ということは、今年18歳の高
校生たちの半分以上が107歳以上生きると言われている社会に、私たちはもう足を踏み入れている。

いかがでしょう。私ですらもう100歳ぐらいまで生きると言われています。まだ35年もあるけどどうしようかと思
っています。そういうような社会で、ここにいらっしゃるいろいろな年代の方々がいらっしゃいますが、皆さん自身
もまだまだ20年、30年大丈夫だという社会に、今私たちは生きています。



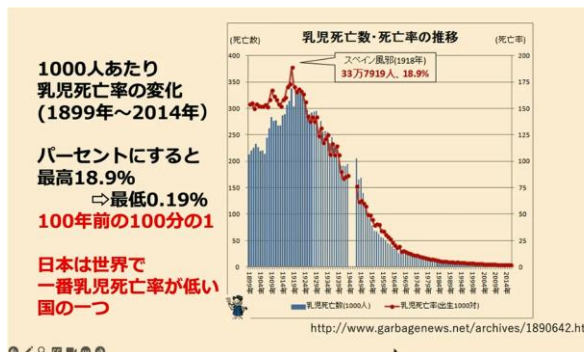
もう人口の構造はこうなることが分かっています。
もうご存知のとおりです。それから、人口も減っ
てきています。今、急速な、これから急減期に
入ります。これを見ていて、なんとなく悲観的に
なる。高齢の方が多くなっていき、人口減だか
ら悲観的になる。

しかも、皆さんが生きている本当の地元の町内会などの担い手がなくなってくるといったことの中で、どうし
ようかと思っているかもしれませんが。実はとってもいい社会をつくってきています。



例えばこれはいかがでしょう。戦後70年間
で日本人の平均寿命は約35年も延びていま
す。終戦直後は50歳ぐらいでした。明治大正
期の平均寿命は40歳です。寿命ですよ。これ
はなぜかというと、たくさん生まれはしたが、こども
がたくさん死ぬ社会だったためです。

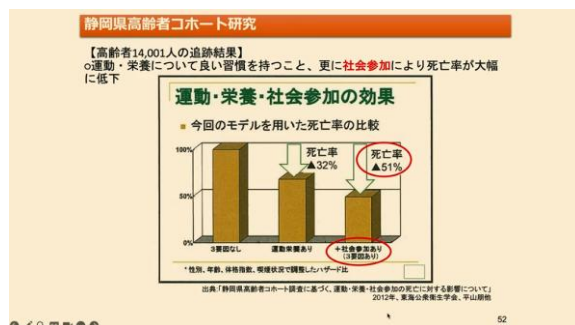
そのため平均寿命も短かった。戦後はどうかというと、生まなくなってきたが、皆さんが天寿を全うされるよう
になってきたため、急速に平均寿命が延びました。これから減っていくのはなぜかといえば、産まないままで、天
寿を全うされた方々が亡くなり始めていくので減ってきた。減るようになってきた。



もう少し言うと、乳児死亡率というのを取りますが、新しく生まれた赤ちゃん1,000人あたりで、1歳になるまでに亡くなる赤ちゃんの数を取ります。新生児1,000人あたりで、1歳未満で亡くなる赤ちゃんの数、日本は1.9で、世界で一番少ない国の一つです。

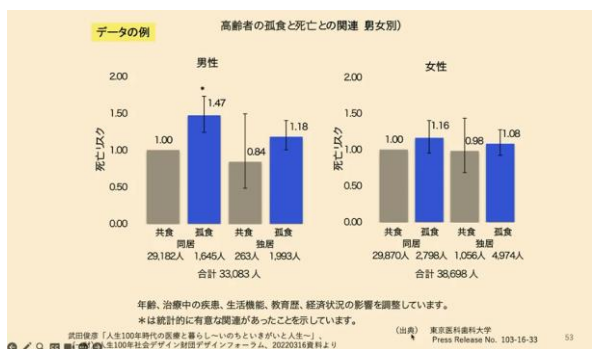
100年前のこのスペイン風邪の頃と比べると、1/100になっています。スペイン風邪の頃、1000人赤ちゃんが生まれたら、190人ぐらいの赤ちゃんが1歳になってないです。だからたくさん産もうとしたのです。自分のこどもが、死んでしまうといけなから。ですが今は多分皆さん、特別な事情がない限り、こどもは生まれれば、ちゃんと大人になり、ちゃんとある意味では年を取っていき、天寿を全うできるとごく自然に思っているのではないのでしょうか。そういういい社会を、私たちの先達が作ってくれたということなのです。その条件をうまく使いながら、次の社会に行きませんかということが今問われているのだらう。

その意味では、もう少子高齢人口減少を嘆くということより、人生100年を生きる時代になったのだから、それをうまく使って次へ行きませんかということになっていると思います。そんなことの中で、先ほど申し上げたように、ちゃんと人々が関わり、つながっていくいいことがたくさん起こることが分かっている。であれば、それをどうやっていくのかといったことが大事になります。



例えば、今、高齢の方が多い社会なので、いろいろな研究があります。例えば死亡リスク、又は死亡率を下げるには何が一番いいのか。多分皆さん経験的には、軽い運動をやり、体にいいものを食べ、そして友達と一緒に遊ぶといいと思ってるしやる。

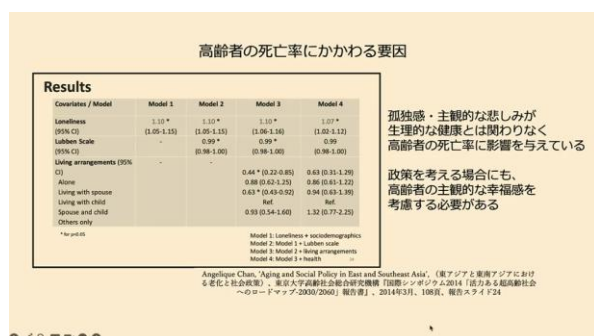
経験的にはそうです。これを本当かどうか確認した研究があります。もう10年ぐらい前です。10年間にわたり、高齢の方々を追跡しました。すると何が分かったかというと、皆さんが思っていることが正しかったという結果が出ました。死亡率を下げるには、軽い運動をすること、体にいいものを選んで食べること、そして社会参加することです。この3つにいい習慣がない方々の死亡率を100 とすると、実は運動と栄養にいい習慣がある方の死亡率が3割下がる。さらにそこに社会参加が加わると5割下がるということが分かってきた。



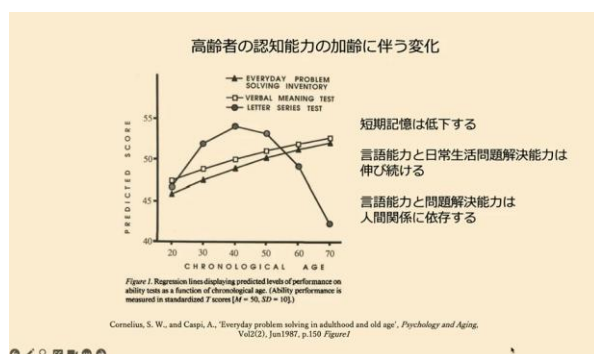
さらに、もう少し意地の悪い研究があります。これは何かというと、ご飯の食べ方と死亡リスクに関する研究で、男女で傾向が少し違います。どこを基準にしているかというと、家族と一緒に住んでいて、仲良くご飯を食べている方々の死亡リスクを1とするという研究です。

上がっている方がいらっしゃる。両方とも一番右のところ。誰かという、一人暮らしで、一人でご飯食べているとちょっと危ないですと言われる。ですが、もっと上がっている人たちがいる。どこかという、男性が特に上がり方が激しいです。誰かという、家族と一緒に住んでいるのに、一人でご飯を食べている人。そうすると、1.5倍ほどリスクが高まります。

しかもこちら、アスタリスクがついていて、何を意味しているかというと、統計的にはこれは意味がある違いですということになるため、ほぼ男性は寂しくされると死にやすくなってしまふ、といったことが分かってきた。よく冗談で言うのは、すみません、ご主人に早く逝っていただきたい奥様は、一人でご飯食べさせておくと、勝手に一人で逝く傾向が強くなるらしいです。という言い方をすることがありますが、いかがでしょうか。私も少し危ないのですが、いかがでしょうか。そうになったら、救いはないのかという、あるらしい。右から2つ目のところ。これも男性の下がり方が激しい。一人暮らしなのに仲のいい友達とご飯食べていると死亡率が下がる。ならば、うちで冷たくされたら、仲のいい友達と酒を飲みに行ってくださいと、そういう話になるだろうということです。この話をしたら、海外の研究者がそれで日本人は居酒屋が好きなのかと言っていました、そういうことになってきます。



これはアメリカの研究でも、シンガポールとの共同研究でも、全部同じ結果が出ています。良い人間関係がある方が、圧倒的に長生きで、健康状態が良いことが分かっています。

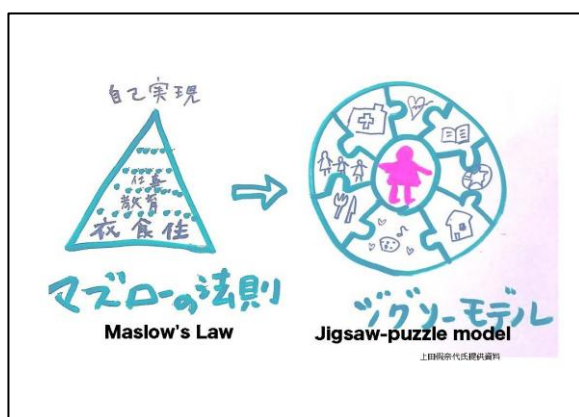


さらに、認知能力はどうなのかというと、私たちが知っているのは、この山型の認知能力を知っています。これは記憶力を基本にした認知能力で、過去の工業社会、みんなが一斉に働いて、一斉にお金を儲ける社会で役に立つ能力だと言われています。

これが鍛えると伸びます。ですが、あるところから脳の構造的に、いくら鍛えても下がってきてしまう。だから定年があるのだと言われたりするのですが、実は違う能力が今あることが、ずいぶん前から分かってきています。2つあります。

1つは言語の運用能力。しゃべる力。私みたいにべらべらしゃべってしまう。もう一つは、人間関係をうまく処理していく力がどんどんついてくると言われています。特に男性が危ないと言われていて、男性は、脳の前のところに、こんなこと言っちゃ危ないと思うストッパーがあるらしいですが、これが、年を取ってくると取れてしまうと言われており、ダジャレがどんどん出てきて止まらなくなってしまうと言われていたりしています。で、女性はどうかという、これまた叱られるのですが、最初からついていないのではと言われていています。よくしゃべられる。それをよくしゃべるといい関係を作ることができて、いい関係を作ることができると、やはり問題解決の力もついていく。そしていい関係があると、またよくしゃべってしまう、それこそこの2つの能力がしっかりと発揮されていくと、いい関係がどんどん作っていきけるようになるのではないかということです。

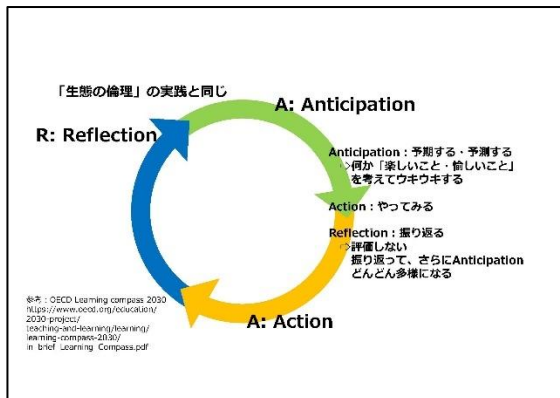
そうすると、実はこういう形でいろいろな研究が出てきています。ボランティアなどをやると、高齢の方々の鬱になることが減り、学生の精神的な健康にもいい。さらに、小さい子どもたちも、しばらく経つと、良くしてくれた大人に愛着を持ち始め、自分が住んでいる地域に誇りを持ち始めることが分かってきたのです。ということは、小さいうちから大人たちと一緒にいろいろな活動をして、大人から認められる関係を作ってもらくと、子どもたちはそこで将来的には、社会のために何かしたくなってくる力を持つようになってくるということが分かってきています。本当は空き家活用の事例などを入れてきたのですが、まだどこかでご紹介できればと思います。地域で空き家を使いながら、人々が交流するという場所を作っていく。それだけでも随分子どもたちはこういうところで拠点化していきながら、いろいろな関係を作っていくのです。



そんなことの中で、これからこのように考えたらどうかと思うことがあります。一つは、人の在り方、見方を変えたらどうか。先ほどもご紹介の中で、モザイク型の話がありましたが、私たちはジグソーパズルだと言ったりします。

一人ひとりが孤立をした人間と見るのではなく、良い関係の中に置かれると、周りから自分の力をいろいろ発揮するように迫られていき、自分でも思いもよらない力が出てきてしまうのではないかと。友達と良い関係があると、どんどん自分自身の力が出てきてしまい、自分でもびっくりして、お互いに良い力を引き出し合うことができるようになってくるのではないかと。これをジグソーパズルモデルと呼ぼうと言ったりしています。

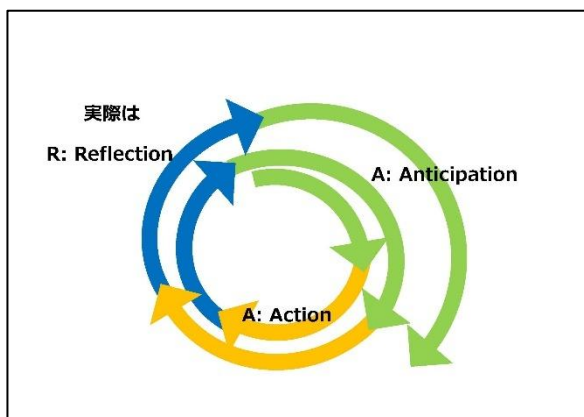
さらに、皆さんで、PDCAを回せと言われて苦しんでいる方もいらっしゃると思いますが、PDCAは実はこれは工業生産をするときのモデルなので、人間や地域を作るときには向かないです。それが今どうしてもそうせよと言われますが、私たちは今これをAARに変えようと言っています。



これは何かというと、Aというのは、Anticipation。聞き慣れない英語ですが、プランとかではないです。何か良いことが起こりそうで、ワクワクしちゃうという感じで予測するという意味です。良いことが起こるよね。ワクワクしちゃうと思う。

Anticipationそうすると当然もうアクションで体が動いてしまいます。

そして動かしていくと、当然皆さんが活動されるときには、これでよかったかなと思い、すぐ振り返りが始まる。リフレクションが始まる。で、うまくいけば、また悪ノリして次のAnticipationに行けばいい、うまくいかなかったら、そんなに深刻に考えることはなく、次はやり方を変えようと言って変えればいいのです。



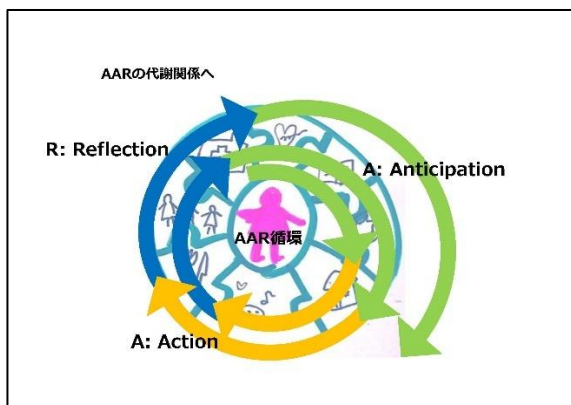
そうすると、これは循環ではなく、巻き込み型になっているのではないかな。巻き込んでいくような形で、どんどん面白いことが起こってきてしまい、次へ行こう、次へ行こうというようになっていくのではないかなということなのです。そうすると実は、みんながやるようになっていく。

例えば、こんなことが起こっています。例えば各地で今、町内会、自治会の担い手がいけないというのはよくご相談を受けます。それで、少し前までそんなこと言ってたって、地元で中学生、高校生いるでしょう、彼らに役員をやってもらったらどうですか。と言ってきたら、馬鹿言わないでくださいよと、よく叱られたのですが、実は最近こういう子たちがいます。

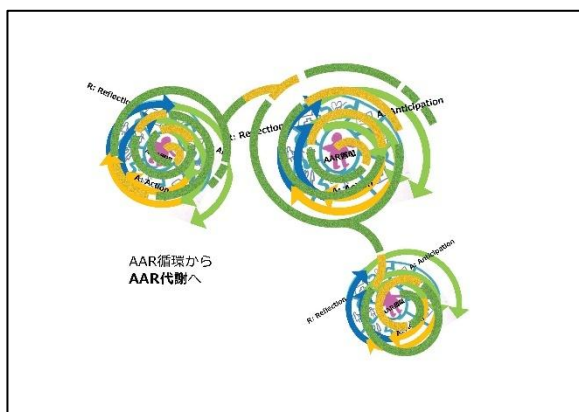
この子が多分1号です。横浜に巨大マンション群の自治会町内会の役員に立候補した中学生が当選しています。3年前に高校生になり、まだ役員をやっています。彼女が役員をやった結果、また友達が役員をやりたい、この自治会では中高生4人か5人が役員をやっています。

それから、この間聞いた話では、鹿児島市でも高校生の自治会長が誕生しています。こどもたちが自治会長をやったりします。これは今、学校が地域探究のような授業をやり始めており、地域に関心を持つ子たちが生まれてきていることも分かっています。さらに、根室市などでは、高校を卒業して普通は大学に行くが、やはり地元ですごく僕たちは良くしてもらい、お世話になったので、地元に関心したいのだからと言って、高校から直接市役所に入っていく子が増えてきたりしています。市長もそれを喜び、将来大学に行きたくなったら行かせてやるか

らと言いましたが、そういう子どもたちが生まれてきていることも確かです。この子たちは幼い頃から大人と触れ合っています。そうすると、自分の人生を考えながら、地域をどうするかといったことを考え始めている。



そうすると、全員が当事者になっていくので、先ほどの大人の中に子どもがちゃんとうまくはまると、いろいろな力を引き出してもらえ、今度は自分が役に立てるよと言うようになっていくということが起こります。そして、それがお互いに巻き込み合うような形でどんどん進んでいくようになっていく。



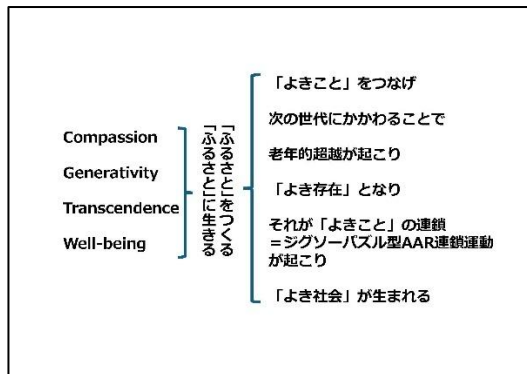
それが先ほどの恩送りにつながっていくのではないかな。相手にとって良いことを次へ送り合う関係が生まれてくるようになってくる。そうすると自分も幸せになれる、社会も幸せになっていくのではないかなということです。そんなことを考えていく必要があるのではないかな。

そうすると、Beingそこにちゃんと置かれていると言ったことで、Doerという言い方が今あり、やる人になっていく。ちゃんと子どもたちは大人の間に置かれていくと、自分でもやれるよと言ってくるようになっていく。それに大人が応えていくと、大人自身も変わっていき、子どもにとって良い大人にどんどん変わっていく。

例えば子どもたちで今、こんな子たちもあちこちに出てきています。地元の食材を使い、特産品を作って商店街で売り、もっと地元をアピールしたい子たちが出てきたり、さらには進学校の子たちが気がついたら自分たちで小学校に行って子どもに勉強を教えていたり。



それから、あるところのイラスト部の子たちは、地元を売り出したいということで、キャラクターを考えて一生懸命発信しようとしている。そして自分が実は街の担い手なのだ、当事者なのだと思えるような形で、どんどんいろいろな活動をやっています。



そうすることで、ある意味ではふるさとをみんなで作っていく。では故郷の一番大事になるものは一体何かというと、ここにあるように良い関係の中に巻き込まれていき、巻き込んでいき、そして困りごとや悩みや苦しみを自分ごと化していく中で、それを何とかしようとして、良いことをやろうとしていく。

そうすることによって、自分が良い存在になっていく。そして良いことを贈られたら、またそれを誰かにまた贈っていくことをどんどんつなげていくと、社会全体が良いものになっていく。そしてお互いにいい関係にはめ込み合い続けていくということが起こる。そんな社会が、これからの高齢社会の一つの姿ではないか。そこに皆さん自身、特に高齢者の方々の役割もあるのではないか。ご自身の人生をちゃんとこどもに語って伝えていく。そうすることによって、こどもたちが、このおじいちゃんすごい、このおばあさんすごいよねと思えるような、そういう環境を作ってやる。まあそんなことから始めていくといったことが、これから大事になるのではないか。そこに今、多世代交流を通じて、この社会を次の世代につなげていく。そして次の世代がやはりこんなおじいちゃん、こんなおばあちゃんになりたい。あるいは、こういうおじいちゃん、おばあちゃんが理想なのだと思えるような、そういう社会が生まれてくるのではないかと思います。